

『愛淫墮ち 一若頭に仕込まれて一』

著：高月紅葉

ill：Ciel

がらんとした部屋には大きなベッドが置かれ、そのほかには木製のチェアがふたつあるだけだ。壁には、でこぼこした緩衝材が貼られている。防音のためなら貧相だ。

入るなり、強面のチンピラたちに服を剥がれた。

ユニットバスに連れていかれ、『興奮剤』と称するあやしげな錠剤を喉に押し込まれる。口から溢れるほどに水を飲まされ、ふたりがかりで押さえつけられた。男たちが言うところの『処置』を強要され、聡は泣きながらバスタブの端からトイレまでを往復した。

そのあとは、ユニットバスで身体を洗われる。ひとりから執拗に勃起した性器を押しつけられたが、外から眺める片割れの男はニヤニヤ笑うばかりで止めもしない。

胸に向かって射精されたが、すぐに跡形もなく洗い流される。あとはバスタオルを一枚渡され、ベッドのある部屋に押し込まれた。

「腹の中、からっぽにしてもらった？」

スーツの男が近づいてくる。名前は高橋というらしい。ジャケットを脱ぎ、ワイシャツ姿だ。悪びれる様子もなく、袖をまくる。

部屋には、すでに塩垣もいた。彼はもうシャツを腕まくりをしている。ベッドに腰掛け、煙草を吸っていた。

「……俺を、騙したんですか」

バカバカしいと思ったが、言わずにいられなかった。風俗でのアルバイトだとは聞いていたが、ビデオを撮られるとは思わなかった。アルバイトだと騙して、ビデオ出演もさせるつもりなのかもしれない。もしも彼らの言う通り、これが実習というものなら、腹の中をからっぽにする必要もないはずだ。

バスタオルを濡れた腰回りに巻きながら視線を伏せると、高橋の足先が床を叩いていた。苛立っているのかと思ったが、答える声は穏やかだ。

「金は払うよ。ビジネスだから」

「……撮影なんて、聞いてません」

聡は硬い声で言った。

「まあ、質草ってところかな。君が警察へ逃げ込んだら売りに出す。データってのは、出回ったら回収は不可能だからね。わかるだろ？」

「俺、帰れるんですか」

「もちろん、殺したりはしないよ。一週間ほど拘束するけど。よければバイト先にも連絡は入れてあげる。親の振りしてね」

高橋の口調は立板に水だ。今度もするすると流れる。

どこまで本当なのかわからず、信用もできない。すべては嘘で、また騙されているのかもしれない。それなのに、声色が温和で耳触りがいい分、反論できない。

騙された自分が、男たちにどう扱われるのか、それを口に出すことはばかられる。想像もしたくない。

「男の経験はないのか。女は？」

背中へ声をかけてきたのは塩垣だ。いったい、どんな会社の『社長』なのか。荒んだ声を聞くだけで、聡の心は不安に苛まれる。

「俺、ゲイじゃありません。女は、十八のときに」

身体ごと塩垣へ向き直った。

「何人」

「……三人」

とっさに嘘をついたが、すぐに見破られる。

「目が泳いでんじゃねえか。よくてふたりだな。ひとは初めてのカノジョで、もうひとは股のユルい年上オンナ。どっちも一度きり。どうだ」

ぴしゃりと言い当てられ、聡はぐっと押し黙った。塩垣が鼻で笑うと、

「あー、当たった？」

高橋も笑った。肩を抱き寄せられ、腰に巻いたバスタオルが剥がれる。

「あっ」

思わず股間を隠した。さっきからずっと半勃ちのまま、身体はじんわりと熱い。

「いい感じに効いてるなあ。じゃあ、始めようか。君が社長を舐めてる間に、俺が指でほぐすから。痛い嫌だろう？」

バスタオルで聡の全身を拭われる。高橋の行為は、聡への優しさじゃない。『社長』の塩垣が濡れないように配慮しただけだ。

背中を押され、つんのめりながら前へ出た。のろのろ動くと、

「もたもたすんな！」

鋭い叱責が飛ぶ。冷たい目をした塩垣に睨まれ、聡は焦った。せかせかと動き、ベッドの上であぐらを組んだ彼の前で身を屈める。

その瞬間、頭をぐっと押さえつけられた。煙草を片手に持つ塩垣ではなく、高橋の手だ。

「優しく調教されたきゃ、噛むなよ」

温和だった声に、影が生まれる。

「んっ、ぐっ……っ」

まだまだ大きくなりそうなモノで一気に喉まで突かれ、聡はのけぞる。同時に髪を掴んで引き上げられた。

「な？ 苦しいだろ？ こういう辛さを味わいたくなかったら、おとなしくしてろよ」

咳き込んだ耳元に、高橋が冷たい声でささやく。聡はこくこくとうなずいた。

「じゃあ、社長にご奉仕して。くちびるでしごいて、舌で舐める……。そうそう」

言われるままにくちびるを開いて先端を受け入れ、しっかり濡らしてから根元に舌を這わせた。みっしりと生えた陰毛が邪魔だったが、指で避ける余裕はない。舌でたどたどしく押しつけるのがせいぜいだ。

「んっ……ふ、んっ……」

刺激に対してぶるっと震える男のものがくちびるから飛び出し、叱責が飛ぶ前にくちびるで追った。両手をベッドマットに這わせ、聡は目を閉じたまま必死になる。

シャワーを浴びていない男の匂いが鼻をかすめ、口の中に独特の味が広がる。嫌だと思った。どうしてこんなことに、とも思った。

しかし、不本意な状況に置かれていることの辛さよりも、喉奥を突かれた苦しさが聡に恐怖を植え付けた。

すでに強制的な射精を男たちに見られ、自尊心は傷ついている。それなのに、這いつくばり、男の股間に舌を這わせていた。隆々と勃起したものが、このまま射精して終わるはずもなく、さらに自分を傷つけるとわかっていて従っている。

逃げられないと知っているからだった。ならば、少しでも早く行為を終わりたい。そのためには、目の前の男を射精させるしかないのだ。いまは、それしか考えたくなかった。

「どうですか、健一さん」

高橋は『社長』でも『塩垣』でもなく、『健一』という名前で彼を呼んだ。

「へたくそもいいところだ」

鼻で笑った健一は、つまらなさそうに答える。興奮めしてくれと願ったが、聡の思う通りにはならなかった。

高橋の持ってきた灰皿で煙草を揉み消し、健一は聡のあごを支えた。顔を上げさせられる。ヤニ臭い指がくちびるをなぞった。

「舌を出してみろ」

言われるままに従う。差し出した舌先を、健一の指がかすめる。聡は眉根をひそめた。

「はっ……」

「そのまま出してろ」

指先が離れ、今度は爪の先でふちを搔かれた。ぞわぞわと嫌な感覚がして、肌がおぞけ立つ。

「逃げるなよ」

気持ちの悪さよりも、得体の知れない男たちへの恐怖心が勝る。逆らえない聡は、拳をシーツへ押しつけて耐えた。

やわやわと粘膜を撫でられ、口を閉じることのできない聡の息づかいは乱れる。まるで真夏の犬のように、はぁはぁと呼吸した。

「吸ってみろ」

命令され、やっと口を閉じることができる。差し込まれた男の指に吸いつくと、くちびるがすぼまり、舌はくるりと丸くなる。それから、聡は口の中に溜まった唾液を飲んだ。それと同時にぎゅっと吸いつく。

節くれ立った男の指の感触で、聡の心は一気にざわめいた。淡い概視感に襲われ、思い出そう

とする。

しかし、健一の指がいきなり動いた。舌を撫でながらぐるっと回り、聡の上あごをかすめて引き抜かれる。

「んっ……」

ぞわっと肩が痺れ、かすかにわなないた。

「もう一度だ。舌を出せ」

健一の低い声は淡々と響く。聡は黙ってくちびるを開き、また舌を突き出した。指が舌先に触れたかと思うと、爪の先でフチを搔かれる。

「ふっ……う」

シーツをぎゅっと握りしめ、聡は目を閉じた。気持ち悪さしかなかった感触の中に、わずかな快感が生まれていて驚く。

ぞわりと肌が粟立ち、腰骨の内側がきゅっとすぼまる。

健一の中指と人差し指で舌先をしごかれ、息はふるふると震えた。開きっぱなしのくちびるの端から、唾液がこぼれて落ちる。

快感を否定する余裕はなかった。拒むぐらいなら逃げ込みたい。そうすることが自分を少しでも救ってくれるような、この現状の慰めになるような、そんな気分になってしまう。

そうでなければ、男の前に這いつくばり、躡をされる犬のようによだれを垂らしている自分なんて信じたくない。

けれど、後戻りができないことは、はっきりしていた。

抵抗しても、拒んでも、結局は同じことになる。この男に犯されるか、高橋に犯されるか、それともチンピラたちに輪姦されるのか。結局は、その順番が変わるだけで、全員を相手にしなければならないのかもしれない。

わかりきっているのだから、冷静になりたくなかった。よくよく考えてしまえば、こんなことには耐えられない。

「今度は、こっちだ。舌の使い方はわかっただろ」

健一が掴んでいる屹立へと顔を伏せる。

快感が生まれることを知った舌先で、薄皮の張り詰めた性器をたどる。

健一が触れたときほどの鈍い痺れはなかったが、犬のように舌を出し、よだれを垂らしたことは、聡に決定的なあきらめを感じさせた。

羞恥が消え去り、自暴自棄が生まれてくる。

どうにでもなれと思いながら、大胆に舌を這わせ、音を立てて吸いつく。ほんのわずかに、さっき途切れた物思いが戻り、健一の指先に染みついていた煙草の匂いが脳裏をよぎる。

匂いと、爪の感触。でも、あの人は、そんな吸わせ方はしなかったと思う。

「マシになったな」

健一の嘲笑が頭上から降り、聡は目を閉じた。甦る記憶を封じて、自分から頭を動かす。無理矢理に頭を押さえつけられる苦しさを回避するには、絶え間なく奉仕を続けるしかなかった。

だから、根元を支え、しごき上げる手と一緒に顔を動かす。

やがて健一の息が深くなり、聡の腰には高橋の腕が回る。

「また勃ってんの？ 若いなあ」

ふざけるように言われ、股間を掴まれた。

「んっ。……や、めっ……」

シュコシュコとしごかれるのと同時に臀部を探られ、聡は健一の股間から顔を上げた。

ずるっとくちびるから肉が抜ける。

「……ッ」

高橋の指ですぼまりを突かれた。濡れているらしく、先端は簡単にめり込んでいく。

「処女ってのはさ、男も女も狭いんだよね。無理矢理するとあっさり切れるし。だから、こうやって慣らしておかないと。……これから、いっぱい客取るんだから」

「……なっ……あ、くっ！」

ぐりっと押し込まれた高橋の指は、容赦がなかった。

ローションが尾骶骨へ垂らされ、何度も何度も抜き差しを繰り返される。すぼまりをぐりぐりと刺激され、指が卑猥な動きを続けていく。

「あっ……はう……ん、んっ。それ、売春……っ」

「そうそう、売春っていうよね。言ってなかったっけ？ でも、男の子だし、性交じゃないよね。妊娠もしないわけだしさ」

ずぶりと差し込まれた指の数が増えたのは、苦しさでわかった。中を搔き乱され、気持ち悪いと思うより先に、息が弾んで乱れる。

こんな感覚は初めてだった。戸惑っても萎えない股間はさらに反り返り、高橋の手に擦られる。

「ガマン汁出るほど興奮しちゃってんの？ これって、クスリのせいだけじゃないよなあ」

「ちがっ……あ、ちが、う……」

男の長い指に敏感な粘膜を搔かれ、翻弄される聡は喘いだ。まともな呼吸を取り戻せず、いっそう苦しくなる。

「いまさら、否定してもな」

あごを掴んできた健一に顔を覗き込まれる。

「おまえさあ、ムカつく顔してるよな」

頬を片手で掴まれ、くちびるがむにゅっと突き出る。

「こういう清潔そうな顔って一番腹が立つよな、高橋」

言いながら、健一はまた聡の首を押さえた。強引にくわえさせられ、苦しさで悶えるほど奥に突き立てられる。

喉への圧迫感でたまらずにのけぞると、わずかに手がゆるんだ。解放されるかに思えたが、またすぐに押さえつけられる。

「んっ……ふ、んっ……」

その間にも、高く上げた腰は高橋の指に蹂躪され続ける。一方で、聡の意識は、喉奥と腰の前後で分散した。思考回路が停滞する。

羞恥がなくなった次は、恐怖が剥がれ落ちていくようだった。後悔の念さえ押し流され、心から感情の一切が失われる。

それなのに、燃えるような肌だけが無機質になりきれない。吐息が乱れるほど、外側も内側も火照り、汗が滲む。

健一に押し当たる舌先は痺れ、昂ぶりで突かれる頬の内側の感覚にさえ、腰は熱く悶えるように揺れる。

ひたすら義務的に動く高橋の指はともかく、一番初めに挿入するのが健一だと思うと、聡の心は怯えた。

舌を何度か撫でただけで、フェラチオをする側の気持ちよさを教えたのだ。きっと、後ろもすぐに慣らされる。

快感を想像した聡は悲しくなった。健一を頬張ったままで顔を歪める。

「健一さん、奥まで突っ込んでます？」

高橋が指を沈めたままで言う。

「してない」

「へー、こっち、締まってますけど」

笑いを含んだ声で言われ、聡はハッとした。健一に犯されることを想像したせいだ。

「挿れどきじゃないですか」

指が引き抜かれ、高橋がベッドを下りる。

「向こうの部屋にいますから。……壊さないでくださいよ」

「壊れるようなものは商品にならねえだろ」

健一の返しに、高橋は短く息を吐く。笑ったのだ。聡が目で追ったが、高橋はそっけなく背を向ける。

ドアが開き、そして閉まった。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>